〔Ⅱ〕平和教育への取組み

徳井輝雄

〔1〕はじめに

筆者は1971年より公害教育に関心をもち細々と研究・実践を積み重ねて現在に至っている。公害教育が人類が生きのびる為の教育であるならば，最大の公害たる戦争とくに核戦争を阻止する為の平和教育もまた人類が生きのびる為の教育である。核戦争を人類が回避できるか否かは，平和教育が世界のこゝかしこで成功するか否かにかかっているといっても過言ではない。まさに現在の世界は，実効のある平和教育を渇望しており，その成果を待ち望んでいる。

戦後の平和と民主主義の教育は，教え子を再び戦場に送るなを合言葉として実践されてきた。しかしこれは戦後間もなくはじまったさまざまな政治的弾圧の下で空洞化してきており，いまや教育現場では，平和憲法を口にしヒロシマ・ナガサキを語るには，相当の勇気がいる情況が生れている。防衛費という名の軍事費は増えつゞけ，自衛隊という名の軍隊はシーレーン防衛に乗り出し，米軍の戦略体系の下にしっかりと組み込まれている。日本列島は米国の対ソ核戦略の前進基地と化している。そのような時，日本を核戦争から守れ，再びヒロシマ・ナガサキを繰り返すなを合言葉に，新しい平和と民主主義教育が構築されなければならない。新しい平和教育は，戦後の平和教育が何故風化していったのかという原因糾明からはじめなければならない。その一つに，受験戦争が激しくなる中で，授業が教室の中だけの閉じた世界で行われ，抽象的知識の詰め込みが行われ，実生活に生かすことが軽んじられようになっていった事が挙げられる。すなわち，平和や民主主義を教室の中や，本の中の知識として学ぶだけでそれが実生活，たとえば，部・サークル活動，生徒会活動，委員会活動に生かされる事が少なかった。大人の世界でも職場の民主化を唱え，諸権利を要求している労働組合の運営自体が非民主的になり，組合員の諸権利を抑えてしまうという情況がそれを端的にあらわしている。このような中にあって，民主主義の気風，平和的な気風が，生活態度として形成されないため，弱い者をいじめ，強い者にへつらい，他人の話に耳を傾けず，従って討論が成立しない，自分達の事は自分達で決めれず上から，権威ある者から，力の強い者から決められてしまうという情況が生れる。これが管理教育を生む土壌の一つである。まさに自分の運命を自分では握っていないということに慣れ切った若者達が育っている。そういう若者達の社会・政治意識はおよそどのようなものであろうか。各種の調査によると，日米安保条約の性格や日本の平和憲法の意義についてわからないとする者が多く（50％），軍隊に対するイメージは，災害救助をするぐらいと甘いものになっている。日本が核武装したり，徴兵制をしくことには反対（70～76％）だが，非核三原則を将来もつゞけることに賛成の者は56％しかいない。日本の現状に対しては，非核三原則は守られていないとする者が55％で，武力紛争が起り日本がまき込まれそうだと心配している者が45％に達している。このように平和の問題に関して約半数の者が関心をもっている。

これが平和教育をとりまく諸条件である。平和教育の目標，内容，方法を考えていくうえで，このことを十分考慮しておかなくてはいけない。

〔2〕平和教育のめざすもの

教育には目的がある。米ソの核戦略体系の中に世界が組み込まれてしまっている現在，核兵器を廃絶し，軍備を撤廃し，平和が保障されるようにする事が，教育の目的となってきている。教育により，人類が生きのびていく為の知識と実践力を次の世代につける事が急務となっている。数々の核兵器とその運搬手段及び命中精度の向上に汲汲としている人々はいわいる「高等教育」を受けた人々である。その「高等教育」とは一体何であったのか！こゝに科学技術教育を中心とする教育一般のあり方が向われているのである。（公害事件からもこのことは鋭く追求された）。何の為の誰れの為の教育か。このことを教師も生徒も，毎日毎日問いつゞけなくてはいけない。このように，教育に人類共通の目的を与えるものとしての平和教育を創出しなくてはいけない。たとえば，科学技術関係の教育では，どうしたら科学技術が戦争に使われずに，人類の真の幸福の為だけに使われるようになるのかを考える事も組み込んでいかなければならない。歴史教育では年号を覚えたり，クイズまがいの知識ばかりを詰め込むのではなく，どういう原因で戦争が起り，どうした

ら戦争を防ぐことができるかということを考える姿勢を培う必要がある。すなわちあらゆる教科で，あらゆる教育の場面で，そして全生活の場で，平和教育は行われなくてはならない。平和教育は，教育の営みの中の全般にわたって存在しなければならない。このような情況が，平和教育を実践する中で作られて来なければならない。今や平和教育は，平和教育と銘打って行われるばかりでなく，すべての教育場面での基本路線としなければならない。

現在の教育の基調は，さきにも若干ふれたように，「管理」である。何に向けて管理するのか。それは従順な労働者や兵士や科学技術者を作るためである。管理教育は，学習指導面では受験戦争に勝ち残る為の詰め込み教育を行い，生活指導の面では，髪の長さ，スカートの長さ，靴の色や形，廊下の曲り方，便所へ行く時間，かばんの形等，くだらない，細い事に生徒の関心を向け，旧軍隊の内務生活まがいの情況を作っている。一方では文科系の部サークルを認めず，生徒会は御用組合化し，自主的活動は極度に制限されている。このような管理教育は，目に見える暴力と目に見えない暴力を，教師と生徒，生徒と生徒，教師と教師の間に生じさせている。教育の全般が暴力的になり，肉体的精神的しごきが日常化し，戸塚ヨットスクール化している。①すなわち学校は反平和的な兵舎か刑務所のようになっている。

本来人間が健康で平和に暮す為に作り出した学校は今や，病人を作り，暴力を生み出す装置となっている。これをわれわれ一人一人が許してしまっている。平和教育を，このような状況から教育をとり戻す一つの突破口として構築しなければならない。その意味で，平和教育は，学習指導の面でも，生活指導の面でも，受験一本槍の教育，管理教育に対しうるものとしなければならない。

〔3〕 平和教育の内容と方法——総合学習として——

上に述べたような目標をもった平和教育を行うにあたってどのような内容と方法をもたせるべきであろうか。総合学習方式によることは言うまでもない。こゝでは平和教育と銘打って行う場合について考えてみよう。

3—1） 平和教育の内容

イ 戦争の実態を知る。

戦争がいかに残虐なもので，非人間的なものであるかを感覚的に知る必要がある。具体的には，まず日本が加害者となって行った，中国・朝鮮侵略での数々の残虐行為。次に日本が最初の被害者となったヒロシマ・ナガサキでの原子爆弾による惨状。核兵器以外の近代兵器の実験場といわれたベトナム戦争での米国の軍事行動。

ロ 戦争への過程を知る

これは歴史を学ぶことになる。たとえば，日本の中国侵略から太平洋戦争そして敗戦への道筋。この中で，天皇制，軍国主義，ファシズムの実体を人々の生活や学校教育のあり様などを通じて学んでいく。個人の日記などを通じて，軍国主義に流されていく様子を個人レベルでみていく事も大事である。

ハ 軍隊とは

こゝでは旧日本軍の実態をみていく。数々の日記や記録が役立つ。「蟹工船」が軍隊の本質を突いているようにすぐれた文芸を通じて学ぶこともよい。沖縄戦の記録もよい。軍隊は本当に国を守るのか？ 軍隊は本当に人民を守るのか？肉弾になるのは誰れか？というようなことを知る。沖縄戦では，軍隊は軍隊を守る為に沖縄人を犠牲にした！軍は軍事秘密を守る為に人民を犠牲にする！

ニ 核兵器の威力と米ソ核戦略体制

ヒロシマ・ナガサキが原点である。核兵器の威力はヒロシマの何倍という風に表現される。だからヒロシマ・ナガサキを例に原爆の威力をきちんとおさえておくことは大切だ。そして現在その何百倍もするような核爆弾が生産されている事を知る。またそれを運搬するミサイルや，それを発射する基地や潜水艦に科学技術の粋が集められている事を知る。核兵器体系のばかばかしさを知る。さらに米ソの核戦略体制を知り，日本の置かれている立場を学ぶ。米軍の核戦略の前進基地としての日本の姿が浮び上って来る。

ホ 死の商人について

こゝでは，政治経済と戦争について学ぶ。日本の兵器産業の実態を知る。経済の軍事化を知る。

ヘ 日本国憲法について

日本の平和憲法の概念と，日本の現状について研究する。非核三原則，原子力基本法等についてもふれる。こゝから日本が平和に生きる道はどんな道かを探求していく足がかりを得る。

ト 自衛隊

日本の自衛隊がどのようにして発足し現在どのようなことをしようとしているのかを知る。新聞記事がよりどころとなる。自衛隊は日本人を本当に守るだろうか？

3—2） 平和教育の方法

平和と戦争のテーマは，総合学習のテーマでもある。従来の教科教育方法にとらわれないものにしなけなくてはいけない。

イ まず平和と戦争に関して調査研究する。これに関連した解説書や啓蒙書を読むだけでなく，平和と戦

争をテーマとしている文芸作品，写真集，映画，VTR講演等を鑑賞したり，聴いたりし，さらに父母や祖父母からのききとりや現在の新聞記事の切抜きをする。このような事を通じて，戦争の実態と現在の情勢を知る。

ロ　次に，読んだ本の内容をまとめそれをパンフレットにしたり，グループ劇を作ったり，ポスターや解説図を作ったり，マンガや寓話を作ったりして，知り得た知識を自分で再構築する。日本の現状と日本国憲法との照しあわせも大事である。

ハ　さらに，それらを文化祭などで発表し，仲間に平和を訴え，戦争のおろかしさを伝える。そして少しでも戦争と平和の問題，とくに核兵器の廃絶に関心をもってもらうにはどうしたらよいかを模索していく。

〔4〕平和教育の初歩的実践

4－1）　必修クラブで

1983年の秋から平和探求クラブを発足させた。1973年から10年間続けて来た公害研究クラブを発展させる積りであった。メンバーは中学二年生ばかり四人であった。

まず戦争の実際を少しでも見るために，VTRを使ってベトナム戦争（NHK特集）をみる。次にヒロシマ・ナガサキでの原子爆弾の被害を知る為にやはりVTRを使って「人間をかえせ」を見る。

次に新聞の切抜きを使って，現在の日本をとりまく世界の核戦略情勢をみていく。生徒一人一人に核をめぐる新聞記事のスクラップをさせた。こゝでみられたものは，INF交渉と欧州の反核運動の動きの記事や米ソの科学者による核戦争と地球の環境に関する報告の記事，日本の核基地化傾向を示している記事，アメリカの核戦略に関する記事をとりあげ，その解説や討論を行った。最初はいずれもむずかしく難航した。約半年で6日ほどしか持てなかった。このような中での生徒の印象や感想は次のようであった。「まあまあ面白かった」「おもしろくないにしても避けて通る事のできないテーマだ。」とくに印象に残ったのは，「この半年間でINF交渉が決裂して米ソ関係がどんどん悪化したこと」や「非常に多くの核弾頭が貯蔵され，もしこれが使われると地球が破壊されてしまう」という事であったようだ。また日本の現状について「日本の平和は表面的で，他国の核弾頭が日本に配備されれば平和ではなくなり」また「そういう可能性があり完全に平和だとはいえないと思うようになった」。では日本の平和はどうしたら保障されると考えるようになっただろうか。「米ソの対立を解消することが先決であり」「日本だけ守ろうとしてもムリである」ではそのような平和を実現するのには中学として何ができると考えているだろうか。「ふだん何もできないがたゞ戦争に賛成するような考えをもったり，態度をとったりすることはないだろう。」というものであった。「クラブで研究する前は，戦争に対する危機感がなんにも無く」「米ソ対立もたゞ暗い話題だ」と思っていたが「将来の日本の平和に対して不安を持つようになった」とともに「米ソ対立を何んとか解決する方法は無いかと考えるようになった」。

このように1983年必修クラブでは時間数が少く，戦争の実態と現在の軍事情勢の把握の段階にとゞまり，それを再構築して，総合学習として深めていくまでにはならなかった。

4－2）　ホームルームで

ホームルーム（中学2年）を対象にした道徳の時間を総合学習的に使う事にした。1979年からはじめて1983年に完成した総合学習グループの授業案――シリーズ「人間について」――にもとずいて，それを中心に中学2年生でも理解できるものに改編し延べ13回の授業を行った。そのうち4回分は「人類の生存と核兵器と名づけて授業を行った。次にその概略を報告する。

まず，中沢啓治著「はだしのゲンはピカドンを忘れない」（岩波ブックレット）を全員に読んでもらい，感想文を書いてもらった。その一部を印刷し全員に配布した。自分達の感想文を見ながら①戦争が起されたことについて②原爆のおそろしさ③日本が核戦争にまき込まれないようにするには，の3点を中心に意見を出し合う。こゝでの狙いは，原子爆弾のすさまじさを，知ってもらう事にあったが中沢啓治の挿し絵はそれを十分に果してくれた。この時の読後感想文の中には次のようなものがあった。

○　私は中沢啓治さんのお父さんを尊敬します。非国民とか言われ町内や警察に白い目眼で見られても戦争反対の考えを変えなかったところがいいです。

○　戦争に反対する人を「非国民」とけなすとは，将校連はとてもズルガシコイやつらだと思います。

○　まず漫画のカットを見ただけで思わず目をふせてしまいました。体にガラスが突きささっているもの，皮膚がめくれてたれ下っているもの……このために亡くなり，親類を亡くされたり，障害を持たされたり，つらい悲しい思いをした人達がいるという事をとても悲しく思えます。

○　広島の親類に，広島はけっこう大都市なのになんで地下鉄や地下道がないのかなあと聞いたら，土を深く掘ると人骨が出るから，それで掘らないそうです。駅の地下街を作った時にはたくさんの人骨が出てきたそうです。これを聞いて僕は核の

おそろしさをあらためて思いました。

○　日本も朝鮮に対してやりたいことをやったからむくいかもしれないと思う。今いろいろ核兵器を作っているけど，そんなものはいらないと思う。

○　僕も，もしこの時代に生まれていたら，一般国民同様，天皇に頭ばかり下げて，こんな事はちっとも反省しなかったかもしれません。

○　天皇は今も象徴というかたちで残っているし，戦犯が戦後も平気で総理大臣になっているという事が書いてありました。べつにこの人達を殺せばいいとはいいません。この人達が死んだって，次の世代が平和になるとはかぎりませんから。でもどうどうとそれを受け入れる日本という国はおかしな国だと思います。

○　今，なぜ爆弾や戦争の準備をするのでしょうか。人間どうしが信じあえないんでしょうか。そうだとしたら，それは，こわくてとても悲しいことでしょう。ぼくは人間どうし殺し合う戦争がいやです。

○　今，アメリカ等では核兵器など，昔よりものすごい（威力のある）爆弾を作っていると聞いて，私はなぜそんなものを作らなければならないのか！と半分心の中で反感をもちました。だってそうです。アメリカだって原爆の恐ろしさぐらいはわかっていると思うのだけれども，なぜそんなものを作らなければならないのか，そんなものを落して何んの利益になるのか……とにかく核兵器をつくるのは反対です。

　戦争というものをしっかり知らない私だけれども，この本を読んだらなんとなく，いや，十分にわかったのです。

　とにかくこの本にのったようなことは絶対におこらない平和な日がずっと続いてほしいと思います。

○　今，世界には核ミサイルがゴロゴロしています。いつ戦争が始まってもおかしくないような状態です。しかし戦争をして何の得があるのでしょうか。僕はつくづくそう思います。核ミサイルがいくつも乱れ飛んだら地球は全滅間違いなしです。あまりにも危機感がなさすぎるのではないでしょうか。あまりにも人の命を軽率に見すぎているのではないでしょうか。僕は怒りを感じずにはいられません。

　著者の中沢さんが「僕は漫画の中で戦争のことについて一生こだわり続けてやる。」といっていました。そしてたとえ戦争を知らない僕たちでも，こだわり続けるべきだと思いました。そして世界じゅうの人々が一致団結すれば核ミサイルのエスカレートもストップさせることができると思います。それ以外に地球が救われる道はないと思います。そして今着々と進められている戦争の準備をもっともっと厳しく見つめていきたいと思います。

次には，VTR「人間をかえせ」を見る。この狙いも原子爆弾のおそろしさを知ってもらうためである。こゝでも感想文をかいてもらい，その一部を印刷して全員に配った。次にその感想文の一部を紹介する。

○　私のおばあちゃんもよく戦争の話をしてくれます。私の家のちかくの家が燃えてしまったそうです。本当に戦争っておそろしいものです。この映画を外国にみせたら外国はどう思うだろう，もう二度と戦争をやらないとちかってくれるだろうか。私は二度と戦争がない平和の国になってほしい。

○　人間が，人間の姿ではなくなってしまう，それが何もしていない，罪もない人間がそのような姿になり，殺されてしまうということについて，ぼくは核戦争だけでなく戦争というものは，ひきょうなものだと思います。

○　「人間を返せ」というけれど，アメリカは原爆で日本人を殺したけど，日本人だって，中国人や朝鮮人やアメリカ人を殺したではないか。（中略）。アメリカやソ連は原爆を受けていないので，その恐さを知らないので核爆弾を作ってるのだと思う。そういうのを日本人でとめたらいいのに。

○　このフィルムをみていて，人間が人間にみえない，人間らしくない死に方をしていると思った。もし自分があんな風になって生き残ったとしたら自分の姿をみて死んでしまいたい!!と思うんじゃないかなあ。でももし生き残ったのなら現在生きている人たちに自分をみせてでも戦争の結果を，傷跡を，戦争をしかけた人やしたいと思っている人に訴え，そして二度とこんなことがおきないように，今の子供たちに教えてあげたいと思う。（中略）。

　今，いろんな核兵器を作っているようですが，なぜそんなものを作るのかわかりません。作っている会社は，戦争がおこったときに売れるからもうかるでしょうけど，私たちからみればもっと他の職業をしてもうけてほしいと思います。（中略）結局人間は自分たちが作ったもので自分の身を滅ぼすといっても別におかしくないと思います。でもそんなことはとてもバカげていることだと思います。

○　「自分の命を自分でにぎっていない」，米国やソ連がにぎっているとは何だか命というものはよわいもので，すぐこわれてしまいそうな気がします。

これから，ぼく達の時代とかわってくるので，命というものが強くなるように戦争や核爆弾で命がうばわれてない平和な日本，平和な世界となるようにしたいです。

○　最初，ビデオがはじまったとき，解説の人が「ぜったいに目を背けないで下さい」と言いましたが，ぼくはやっぱりテレビから目をはなしてしまいました。アメリカのたった一つの原爆であんなに悲惨なことが起きてしまったことがとてもいやです。

身体の皮が火傷ずりおち赤くただれているのを見ていると思わず目をそらしてしまいます。

（中略）。

今では昔落された原爆・水爆の何百倍という爆弾が作られ，もし戦争がおこれば，地球上の人々が全滅するほどです。原爆を作る者は，それを強力に開発することによって，自分が死んでいくようなものです。いわば自分で自分を殺しているのと同じだと思えるのではないでしょうか。そんなことはとてもバカげていると思います。なんとかこの爆弾を地球から追放する方法は見つからないでしょうか。

○　『人間を返せ』のVTRはとてもショックでした。これまでに，いろいろな本を読み，そして写真を見，映画を見てきました。でも，今日見た30分たらずのVTRのほうが，私にとってずっとずっとショックだったのです。それは現実問題として私にふりかかってきたからかもしれません。でも，もっともっとショックだったのは，被爆者の人々の勇気です。もし，私があの人達の立場にいたら，彼らと同じ行動をとることができるでしょうか？人々の前で自分のあのようなすがたをみせることができるでしょうか？そこまで強くなれたでしょうか？もう絶対あのような戦争をしてほしくないと心の中では強く願っても，そのことに対して自分の体をはってまで訴えていけるでしょうか？それをやってのけた彼らにとても感動しました。それと同時に自分の無力さ，勇気のなさなどいろんなことに対して，イヤになりました。みんな世の中高校生は，戦争はいけない，核兵器を失くそうなどと心のどこかでは思っているはずです。ただ，戦争とは原爆とはどんなものなのか，ということが見聞きだけの知識だけで現実の問題としてピンとこないのではないでしょうか？（私もその1人でした。）ドイツやイギリスなどでは，若者の反核集会や反核を呼びかけるデモやコンサートがよくあるとききます。でも，日本ではそんなものはほとんどありません。唯一の被爆国の日本が，その若者が何もしていません。日本が反核どうのといってもアメリカが，ソ連がスイッチを押したら，それで終りです。でも今日見VTRのようなものを世界中の学校で流したら，そしたら何かが少しは変わるかもしれません。私は今日のVTRを見終って今すぐにでもアメリカへ，そしてソ連へとんでいって，大統領に書記長にあって話しをしたくなりました。核兵器のスイッチをおしたら，その30分後には自分も死ぬんだぞって，もし，あんたが生き残っても他の国民はみんな死ぬんだぞってどなりたくなりました。日本は，もっといろんなことをしなければいけない，その義務があるんだと思います。これから少しでもそういうことにかかわっていけたらと思います。このVTRをみてよかった。

これらの感想をうけて，飯島宗一著「広島・長崎で何が起ったか」（岩波ブックレット）を学習した。これは原爆の人体への影響がはっきりと示されており，原爆製造のいきさつまで述べられているので大いに参考になった。しかし中学二年生ではむずかしいところもあった。さらに日本の核基地化の現状を学んだ。

〔5〕　今後の展望とまとめ

平和教育はまさに総合学習の立場からすすめなければならない。この立場にたって，総合学習グループとして，平和教育に真正面から取り組めるようグループ内での討論を十分深めたい。

次に，いつどこでも，継続的であろうと，投げ入れ的であろうと，戦争と平和の問題に関する授業ができるよう教材と教案例を作っておくとよい。とくに教材を精選して準備したい。次にその例を示す。

(1)　戦争の実体を知らせるもの

石川文洋　ベトナム戦争写真集

本多勝一　中国の旅　朝日新聞社

戦争証言シリーズ　太平出版

中沢啓治　はだしのゲンはピカドンを忘れない

劫火を見た　日本放送協会

VTR　人間をかえせ

岩崎書店の歴史シリーズのうち　戦争への道，日中戦争，太平洋戦争，戦火の下で等

(2)　日本軍の実態を知らせるもの

神崎　陽　ルソンに消ゆ　鵬和出版

戦争と沖縄　岩波ジュニア新書

小林多喜二　蟹工船

その他沖縄を中心とした日記や証言もの

(3)　米国の核戦略体系と日本の軍事基地の実態を知るもの

豊田利幸　核戦争略の曲り角　岩波ブックレット

石川　巌　核さがしの旅　　朝日新聞社

(4)　核戦争が起るとどうなるかを知るもに

飯島宗一　広島長崎で何が起ったのか　岩波ブックレット

中沢啓治　はだしのゲンはピカドンを忘れない　同上

(5)　核兵器とはどんなものかを知るもの

豊田利幸　核戦争略の曲り角　岩波ブックレット

豊田利幸　核戦略の結末　　岩波書店

このほかに反核運動の状況についてはその時々の新聞記事などが挙げられる。上の(1)〜(5)に加えて憲法の興味ある学び方を研究することも大切である。今後これらのテーマが3−2で述べた方法によってどのように深められたかについて，総合学習方式の成果として報告をしたい。

注

① 1984年5月8付朝日新聞夕刊は，茨城大人文学部の同大生を対象にした小・中・高時代の体罰体験に関するアンケート調査結果を報じている。これによれば，学校教育法で禁じられている体罰が，小・中・高校でまかり通り97％の者が体験したとしている。